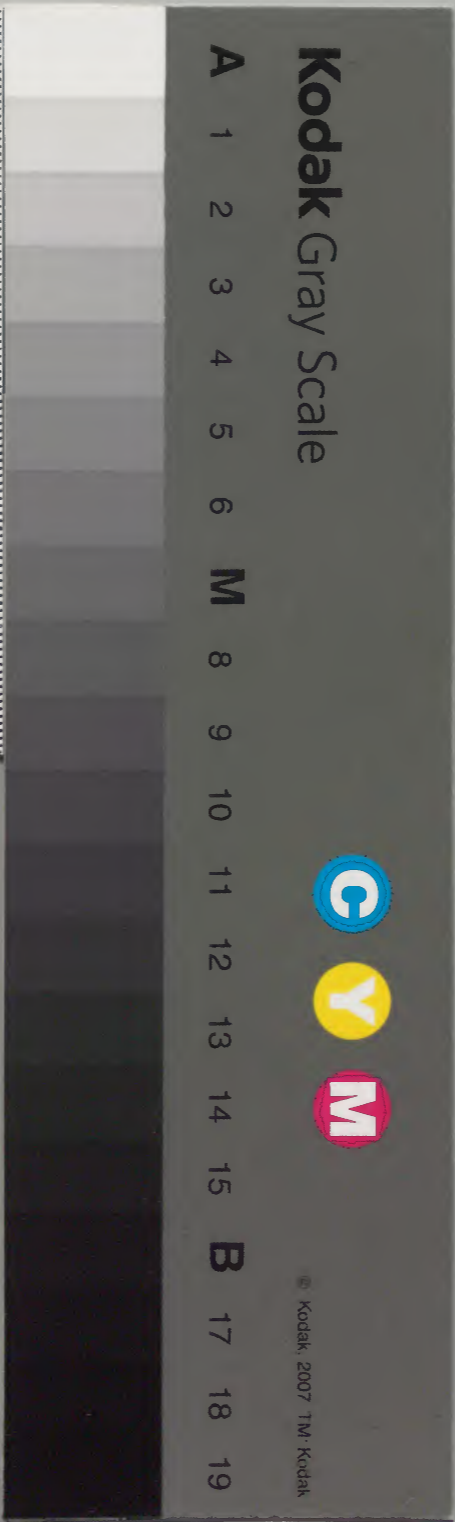


あまのあはれ記 九十

和書門			
二七五三〇	九	函	號
二〇	不	架	冊

内閣文庫			
二七五三〇	九	函	號
二〇	不	架	冊

内閣文庫		
番號	和	27530
冊數		20 (5)
函號		176 268



お右軍記巻第九目錄

龍舟の思満城軍のり付交野を山抜魚のり

宿軍の思満城軍のり付源満仲敏のり

本軍の思満城軍のり付中理新之部源素のり

明遠修治のり付純友兄弟不和并玄宗皇帝事



下

前古事記卷第九

龜形回馬後乃賊軍此事付文野を山嶺懸の事

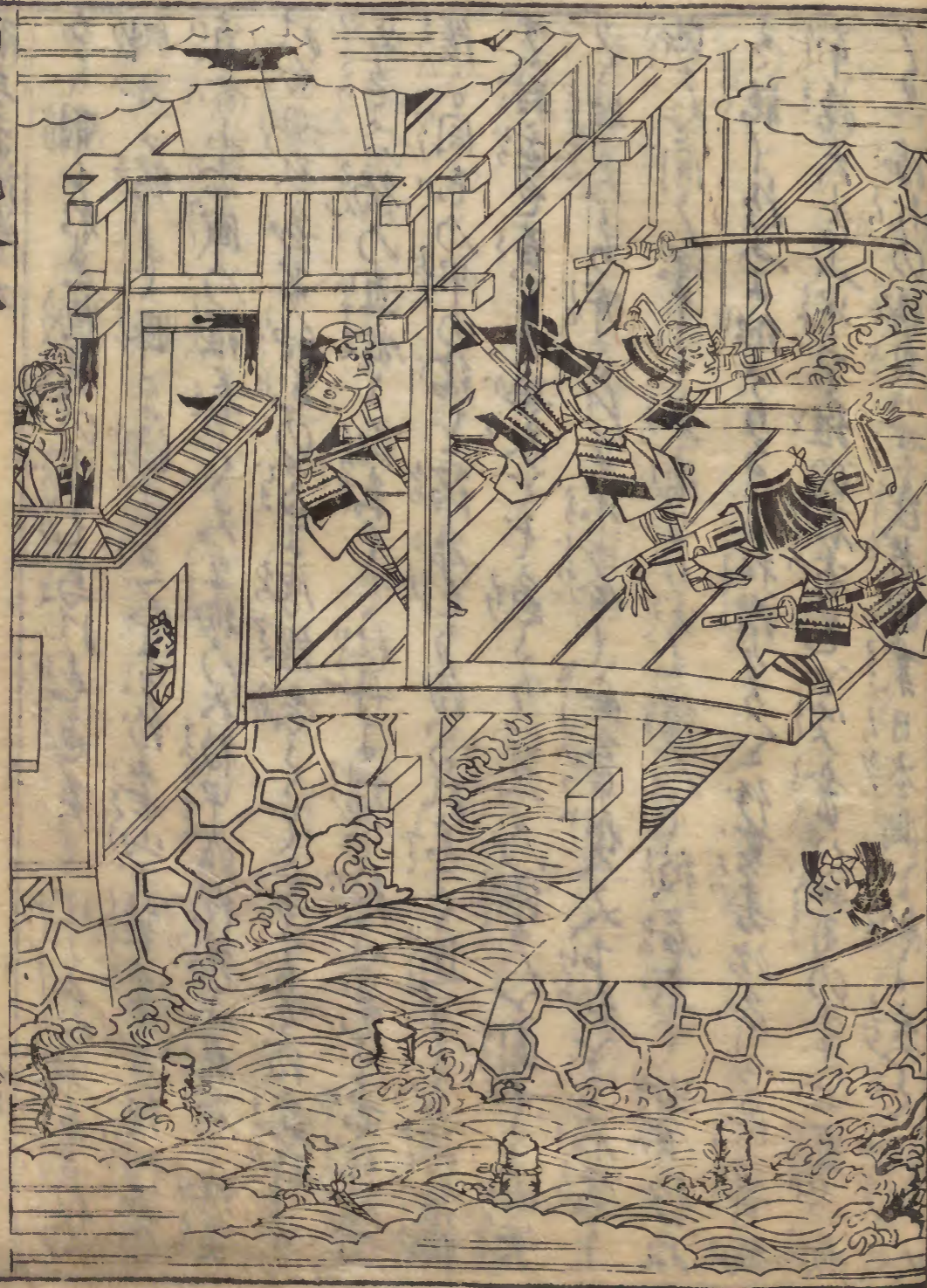
伊勢縁純友ハ七月十六日より龜形回馬後乃出陣して会米権亮
 純素が若松柳の浦ゆく敵を交へ戦ふ間水減と憐く備後乃又
 官軍ハ昨日一所の交友乃致し人馬を不斃を一毎に斬る
 龜形懸ゆるの是と休く昨日十六日より三度入るる懸と法大
 將許之ありく若松の浦に陣をめぐり懸けけり家小好古御殿
 中ん陣よ交戦の意を命付遣と懸山に河の三陣紫持ハハ陣を
 をまぐくあよりけり昨日七月下旬にく城君冒衆苦熱病
 脇に女日曉新の意を命付遣置のありきと法大んと懸山が
 後所より来り惟幕を裏作草と用と波捷輝が國君の懸取
 國引秋も表に生じ懸取とが招涼乃珠清也

前古事記卷九

下

任世と多ありをば後りゆ六蓮山殿とて勢勢作らつ
 也昨又八山所方とて押ゆりゆ小早迷而快氣乃極と云り
 等一尸えんあふ馳新下作と云れん幸山石取敢えん作軍旅の
 事とて久ハ字名醫とてもさくは故遣一兩方一振甲必振と
 由合少て用いひゆ一ふ忽ち膝病乃熱痺てはと戯せてつと
 させ人相考よ向えんそ馬と並ぶく打せり既よ是後よ道有
 て城乃様を見ゆらる小宮を城お極よりと云く東面ハ
 沿打際より南十餘所が約戻一重なりと云よ且橋を橋又
 十餘ヶ所よ橋あへん度と云又條りよ城をりり大海と云入られバ
 湖隈とて飛渡らんとす是共深とてあへん深よ八乳株逆木盤
 く引ぬら山の子よ八麻頃と重くは結廻して馬の足と云を
 トと橋へより北の流よはむ百艘の兵船とて艦船は橋橋極て

橋あふ射んと扱より月経時少て旗の又よ存と大塚終
 つらりと是て又百流澳と云風よ翻て龍蛇乃動く如きり
 初て二人が兵八十餘人馬せん鼻は雙とて同多小時の声と上り
 唯今乞へ先登りて寄事乃剛の者と何と云者と云とん
 固乃後人交野荒を即時澄同固の後人遠山を去る部守持
 あり右より右若さる飛ん是懸ハ雅不味特小我ハ極懸と云
 首近北離我今目乃合戦ハ打込乃軍とて剛膝不更可懸敵よ
 之マ難途と云ハ初く早且よ押寄られ毎度も柄と澄りゆ
 と受ゆり権亮純素ハ坐せりる鬼神と威と振りて伊が先才
 ハより剛と用と打て出絶く脚負と受り人となも上て也
 若菜より海中よ六音を台派十方の高橋より放くとも射り
 々々若くとも煙もも是と一矢と裏とて守左太す同は経也経



うく明も物具の威毛馬は毛色赤く中へ出せられた
 朝日も映して輝き照らすに山が装束も六段村儀の
 直衣も志威の儀着く大木物の大板甲成格願不着す
 此白母衣多者此ものるも厚總もくど常らるる所立野か
 出さるる八福の直衣も白糸も杜丹も蝶と縫せ是も赤絲威の
 襪も同毛の甲の緒と縮庵もるるにさく進了るも海濱
 赤靴を履き黄もり母衣もぞ致さるる一乃城戸と固めらるる
 く曉天より寄るはよ不出合も無言申度又下知も不受り
 城戸と固し事し率爾り出せ進んと被着きて出合ぬぬ
 を膝にひかす似らるる私語多くと伊賀者此部が郎等柄
 本條六とら早つ鐘の若者是と安事ハ其角の事と宣ふ物
 る一隊行の勝負ハ葉茂者の業日本國と敵も交く結致人

と云はれ軍持の刃の何ぞ輕く生死極むわらんや
 某島出被等の首と捕く膝くつり伊賀者郎等ののら
 の程とつせしんも是城戸用さゆへと唯一騎致すも八回
 中郎平を相續てと出らるる遠山打身くはるは准と回入
 伊賀者此部の家の子柄本孫去元好と名あり宗持やうくと
 緩い青もりも出合と声と限も叫りるも死と知れり膝くは
 う今も即く始く敵と云者としてら母らるる伊賀者人出合
 ぬ場へ出合へ志ハ絶くはれ共わぬ敵も立ぬとを助さ
 り柄本腹と立逃ぬ敵とハ安憎一時の運も極く將と如
 きの者も如くも剛腰何も可判實も死程ハ著るれも
 の程と試して死出乃山路の物成よせと討て騫直よと多
 かり遠山の身等も不絶せと懸隔りて一と絶ては

と社を引遠く移すもあまぬ馬が同様の盛重く上城より
あつた田中をり寄て柄本の馬は打多く荒れ野を打て
あつた時陰あいの鞆と下と打く押しあつたついでに田中
總角振く弓杖み矢計を投りたる所云々遂にを山を
等と巡りて首捕くた方と共うつりて棄尚も守待
り巡りと交遊有りて此等振る振くる上より引下りて
そまらりたる遠山たのむと伸く柄本甲の手返り多と入
て来し云々引寄せ鞍の前備に雅付くけて首と八槍たり
城中は是と云く弥多合んとせぬを云々射りし多かり
ついでに多合の冠附くあつた官軍八万に記遊の振り
利国時と押寄せ時の声と上りて城中より射と合守は矢
合の漏矢射とせ一勢く攻寄せ一乃開と内介へ押切遊

いまの頃つらつた戦ひ何れ勝ありと云々つらつたり六月
辰乃初より軍始く廿八日乃申し終りて夜書三日の間息
不降攻められ城中はと不弱寄りも更よ不退屈何れ勝
分りたり官軍も役所と構へ對陣とあり晝夜見書し其と出
一攻強いる間七月を過りて八月始よあつたり秋てハ子跨り一
跨りあつた七年暮くの年よあつた何れ果軍も見入りり
?

官軍引退る事付 源満仲敵事

對て人の思ひは官軍後第より列ら賊徒一日と不降得
時可被攻滅と思ひし思ひ外に悔く殺目と終る共城中矢種
も不盡却白官軍攻座よりと笑られし運法友招り計く
一偏よ不交固く乃勢忽ら屬敵面く構城所よ敵國に降

源満仲敵事

二

浦とと國々々々又も國々八幡村平六系家名府の敵よ
 ぬく又國中此賊後等と察り文司志間ニケ所々國々居て山陽
 乃と指塞々所々官軍兵糧運送乃道絶々心の外々困窮す
 依之國々の勝成ハ搦虚病の事々々事々々寄て本國々内り
 々々同作ハ八萬々池と考々々八月上旬々々々ハ四萬餘々々不
 宜々々玉井庶司榎實軍奉約々々進るれ村々郷々々々々々々々々々
 伏莽反是と配分々々々諸軍勢乃兵糧々々々々々々々々々々々々々々
 刻々今々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
 八月七日々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
 々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
 徳と構々兵糧々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
 朝通二々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

被成とと進出々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
 廻賢慮作へ々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
 乃諸々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
 て大儀乃討畧有々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
 此々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
 乃舞火々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
 と因々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
 々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
 々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
 充満々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
 々々々陣ハ右軍々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
 々々河内々々小野保衛二子々々々中陣ハ惣大将小野好古朝臣孫

王源經基王と名おぬ家の門に一族六十餘人
 陣八通より引下りて馬の源満仲其間加夜と
 其間加夜と名おぬ馬とわさるる既におも
 小村遠より跡を顧まはせと追ひし勢と身
 備仲少し不澄治跡とて究竟の防場され
 西よりるゆゑ中間とまゝ第一町計ありて
 乃射子者八百餘人楯乃板と雖も知ら
 弦と懸して扱へり本陣ハ二町餘り引退
 之を分六よりしたる三ヶ所入扱へり
 庭を作敷け唯一馬場懸物とて陣
 於此の射子指反引張矢種と不惜射
 始乃跡入相遠して無先不進得り
 其間加夜と名おぬ馬とわさるる既におも
 小村遠より跡を顧まはせと追ひし勢と身
 備仲少し不澄治跡とて究竟の防場され
 西よりるゆゑ中間とまゝ第一町計ありて
 乃射子者八百餘人楯乃板と雖も知ら
 弦と懸して扱へり本陣ハ二町餘り引退
 之を分六よりしたる三ヶ所入扱へり
 庭を作敷け唯一馬場懸物とて陣
 於此の射子指反引張矢種と不惜射
 始乃跡入相遠して無先不進得り



追ひの勢も相負ふ懸て入孔て我隊ひかたの備仲攻守
奇正態変わあつぬひる間さるも伊賀先弟攻めえて
そ見入りける敵也方此討の声山海に詔搦して點とくまへんか
後陣の軍陣とありと踏く満仲の舎弟兵部丞滿政の子
これと佐澄と合く返り合を抄ひたり敵此勢と大勢とんか
れしりもくも勢乃手あつぬ先と返せし我もくと引くゆく
伊賀先弟大青上兵甲斐者兵式返せやくとるは是と立直
く子志をれと耳少く不許入唯我先弟と逃りたりたるゆか
兵兵さのも長追を途とて勝討つとせとく人々追付進めし
と兄弟打連馬と早め抄ひたり

伊賀の回菱形山軍并中程約三所路系の事

夜脱よめぬも官軍追付と引く落約路やと抄落ありたり

幸而國の凶徒亦不道也此海賊等と集くも伊賀八子路人柳が
浦は陣をく敵と去く待候より先陣も打せしは右走利度者
大差要春實此抄をく奇性なゆぬ系式兵部乃為人
必い辭事して可情合と先ん事をも不候されつこは首切懸
自餘の敵も見懸るせんとい儘も八子路と二子路と南より
面し石振切く多りたれど此依海賊不及一戦搦と捨うと意
て林の鳥と追やとく空角八方へ逃散るゆされども控可め事
敵もく先後よりと先ん事をも不候る官軍安んありるも心
此後の手括者一人とありて十日れ去れ討計も同回空依那表
抄ひたり是の敵兵糧運送の道と指塞んとて八子路之子と被
り殺して長らける間敵も依方合部一難りたりゆめを聞
て往くゆめは十日官軍菱形山に寄りける敵の心と一

て資長スリタカの向むかく云いふ所の純友ジュントウ兄弟ケイテイ九列クウリュウを攻入カウイ逆賊ギャクタクと名なひし
 刻シク一旦イツパンの難ナンと道ミチは危アヤシく不フ慮リョを以もつて敵テキの屬リョクにささ熱ネツを以もつて不フ慮リョ
 一人ヒト勝カチたはなれど彼取圍カヒトリキ作ス回ワウ此コノ子細コトハシ不フ及ク上ノ弓ユミ箭ヤ取ヒ力カラ
 一夫ヒト仕シりし海ウミもなれど既イデより舟フネを連ツ索クサく討死ウチシと快カク刃ヤりしは
 て先マツ母ハハ者ノもせむ善イデ事トもせむとぞ然シカドも是コノ邊ヘんせよ致サシて思おもひさハ
 む人ヒトとぞ未マだ東アキ也ヤとぞね少オト者ノが偶ハず熱ネツを以もつて故コ不フ是レの慶ウレシま
 能ナく忽トち他ヒの嘲アザカシと志ココロを以もつて預ヨクくハ志ココロ色シキれ計ケりしはシ徳トクと眞マコト
 一被ヒヤ上ノ今イマもぞ乃ハ罪ツミ多クとぞ不可イコ者ノ也ヤ先マ知チりし作スるに仲ナカ頼タシ隊ヲ
 人ヒトよ可イカまはしと少オト者ノが髮カミ搔カか振ア振アと吾ワレも被ヒヤケレた深フカイ長ナガく思おもひ不フ
 哀アハレと催ソわれられし志ココロを以もつて之コノ乃ハ夜ヨとせよ乃ハ終マり終マり終マり
 將マシ熟ジュク多ク思おもひし九列クウリュウ志ココロを敵テキにめく是コノ乃ハ諸人シヨジンの志ココロを以もつて
 今イマも許アハ諾ダク人ジン皆みな是コノ見ミ懲シりて諸人シヨジンよ志ココロを以もつて不可イコ者ノ也ヤ

新アタラ罪ツミ軍イクサの看ミ川カハ子コ分カれ尚なほ有あ珠たま功こう約やく思おもいと可い中ちゆう與よとん志ココロ
 わりて合あ戦せんと止とまさるり朝あ通つう不フ斜しや松しょう々々城じやう中ちゆうに小こ籠かごり所ところ乃なり兵
 百九十二人ヒャククウニニジン皆みな諸人シヨジンにめくぞ出デまり初はめて信しん長なが舟ふね機ばり入いり
 舟ふねは朝あ通つうと船ぶねめ諸人シヨジン乃なり軍イクサ一人ヒトも舟ふねに不フ知チ却かく禮らいと厚こうく
 任たのみと施セりし所ところ乃なり朝あ通つう忽とち敵テキと力ちからの如ごとく翻ひるがして専せん軍ぐん
 合あ體たい乃なり志ココロ又また他ヒ事コトもぞいひ之このよもふ

明達修信事 純友兄弟不和并玄宗皇帝事

玄振ケンジン都みやこ乃なり官軍クワングン不フ勝利カチして賊テキ後あ孫まろ龍りゆう紀きすしとあつたれど
 信しん威いと去い力ちから加くふ不フ殊こと伏ふ早はや速すみも難かん多クとぞ信しん長なが舟ふね機ばり入いり
 信しん長なが舟ふね機ばり入いりし大おほ信しん長なが舟ふね機ばり入いりし中ちゆう不フ思おもひ延ヒ暦レキ寺テに
 信しん長なが舟ふね機ばり入いりし中ちゆう不フ思おもひ延ヒ暦レキ寺テに
 第だい六ろく日にちも高たかく壇だん上じやうは純友ジュントウ純素ジュンソ二人ヒトニ人ヒトを相あ見ミ分カて終おる

降之提督是才在而亦之分て相残事奉討計ありたり女聞
 及之る像と現し二人とたを乃のり子に撫く燈燈乃炎の中は
 抛入せよと及くればこの邊の修治乃功力既に顯をねねと歡喜
 有る彌丹波と礮し此のり實に治依乃力に據る人修治掃
 絶友去わたりはより宰府に泊り居たり十月下旬俄に兄弟
 中悪く如く權亮純素を勝三萬の兵を引分て里傍城を
 籠るなりこの何の事やんと後よ起と為る官軍里傍と引退
 て後絶友の憤つと今ハ何程の事や可有と菱形山と自ら去る
 とせぬ的言酒宴に軍旅と忘る傾城妓女の色を着て遠境
 壊と不謂常く為求り乃交よ松原乃千代と云く遊るハ九別
 弟一乃無女とては雙の寐妃ありたりと權亮純素及び此女と
 別處に居るは絶友此事に當りては是迄の依兵を是に非奪奪
 たり具るは治下達し被打擲教くは版を逃しりり中よ
 心貫き男一人何とた體にて跡目付くを行方と見たりけり
 一ハ大将絶友の亭に入るは彼男は汝權亮よ治の純素人よ
 怒く何事なば事れ可有や我苟く自害する不精身命を把
 決滅誅戮強敵を縁列運と一時は怒り威と九回に振ひ治事
 是併我續りて経同胞乃我よりや云と此男と候く絶謝乃公
 可有小却く及此程籍治事しそは恨多きを此東村葉の事
 と云く某子對て初経途の振舞向後更に強くは云と
 勢と引分宰府に打たれり多る骨肉連枝乃契絶く冠繼
 怨敵乃中と我威おろし是と云く古と云く唐比世第六主
 宗明皇帝と云く女ハ睿宗の禪へ受て元平八月天子志
 位よ昇治小天性目初に兒賢ましく自萬機乃政意と治守

前古事記卷九

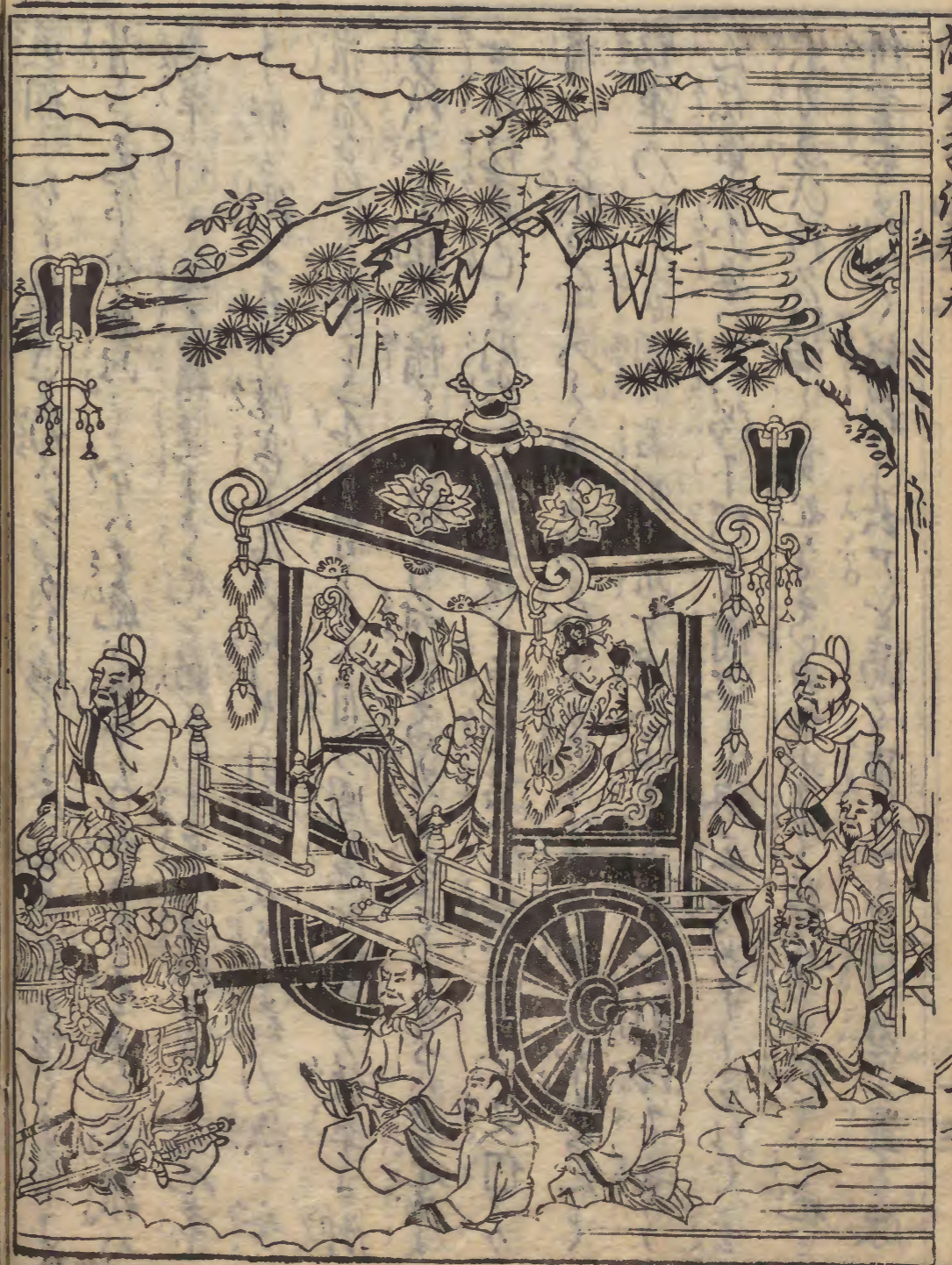
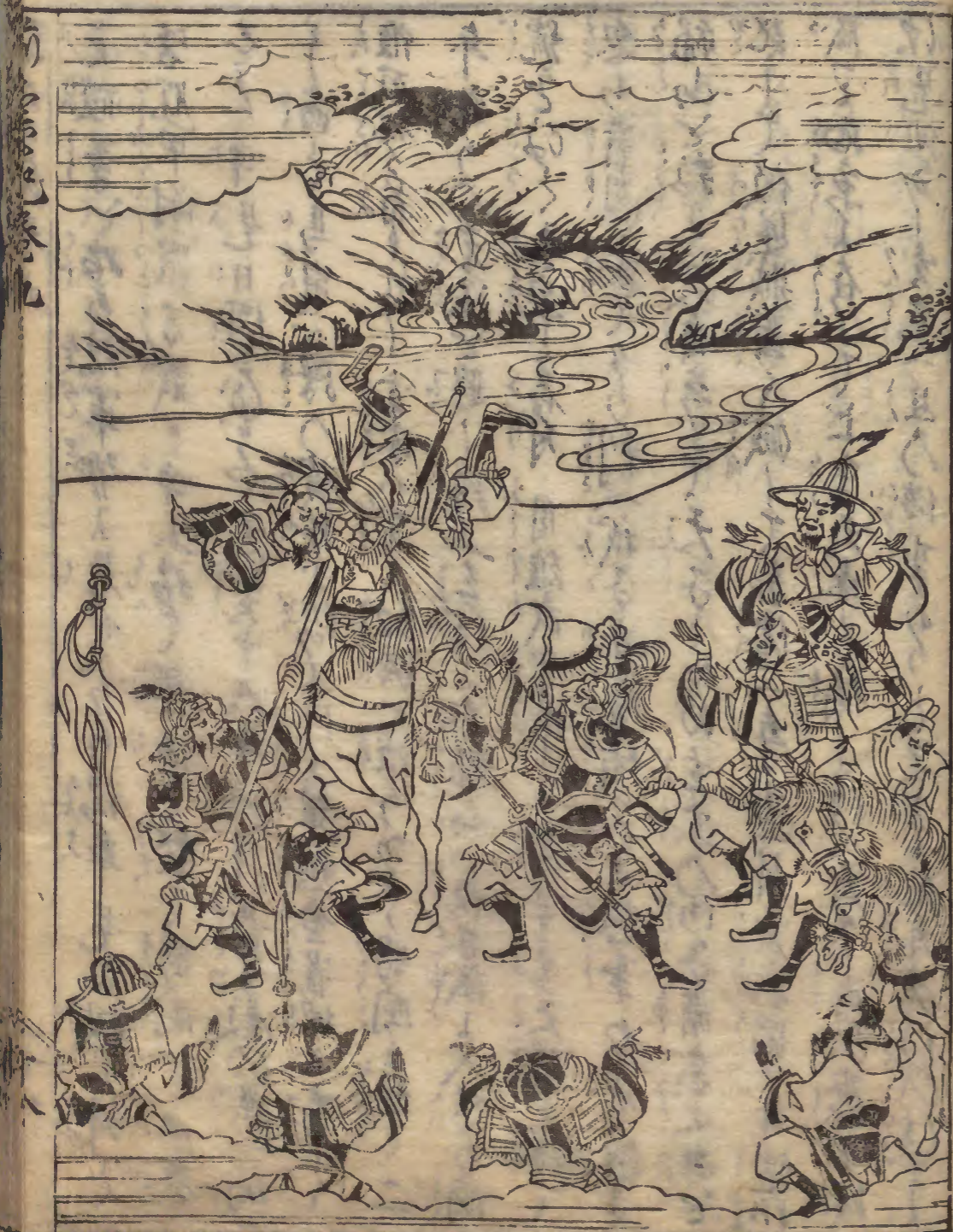


侯約と本少一珠玉錦繡と焚て小男れ奢と禁賢臣以舉
 節倭人を遠く孔孟老在乃道は富麗心書院と建く文子の
 軍と飛り書を修一終を備せし先孔子とく文宣王と倫一
 莊子とく南華真人と對し如ひしと此朝の事とる也
 愛民如る一子乃とく一天太平少て四海安康とるは世
 舉之中興乃明君太平天子と崇めさ家よ弘農楊玄瑛一
 人の女と持り楊家れ女は依く楊太真と云へり初て長て天
 皇の生所聲質自棄難く地を報せの容色又雙句深圍し
 養育しといまご知人かありしと玄宗乃の弟唐王は紙求清如く
 妃と稱し然る不玄宗と真が容彩羨舞少て固之を奴をり
 して民間の納く后宮を備へし事と乞如くも不叶なれん
 遂に天寶四年八月は韋昭訓と云者乃女と以て唐王の妃

中一太真と奪取く后妃乃位は倫人をも改く楊を祀
 と号に殖氏圓て一若は百に殖水宮の粉袋更よは教也
 之子乃家愛在一身春ハ春を存し後ハ其ハ其を告く
 若青若短して日之く紀く此より玄宗早朝し後ハ次
 唐乃世ハ頃廢於是興長生殿を造躡山宮の樂不究と云
 所ハ新創也此が姉妹名大圓封して秦國夫人韓國夫人
 號國夫人と云り先楊國忠を右丞相とく天下の政務を令
 韋國忠を性大逆を道すて己の權勢は募つて朝息を憐て
 萬公乃任は振舞々る間天下の民皆恨と不念と云者乃一
 之ハ又安福山と云者乃東平郡王也爵と賜り厚朝恩と
 羨あつて熱玄宗乃其也上愛て國政を怠り所を令て天下
 と懐一也瓜奪んんと企く極くよふ象として先詰て其也
 天子と知る人事と知む玄宗思ふて許之を令りて福ふ
 多ハ其也と母と稱し曰大容不通ト極極言累代の太極
 約ハ時と窺居るりり或時吐蕃乃我を命よ背く事乃これ
 楊國忠と大将とて令征之元來國忠は極宴樂と極曾
 て去年ハ劫劫と不意更よ軍旅を令退と守るり乃は敵ハ
 僅よ二十万騎官兵ハ六十方乃大勢あり一がぞ一戦少く不
 及打負て空く長安を極んとは國忠ハ此極して極ハ
 玄宗乃慮慮ありを令して四方乃兵一萬人の首を斬て吐
 蕃が首ありと偽く玄宗乃名を奉つて極を令て罪をく
 殺して其兵乃後裔皆憤と令恨と欲く楊國忠と殺
 んとを企つる安福山此事を告く時を待りて喜ハ楊國忠
 不可討つと勅命なりと偽り軍兵と招き々る不攸罪をく

殺されし兵乃後殺り外少し因忠が成敗を怨む者矣と為
 と云ねを不知ぬりなれど我りくと地集り志を一つて長安
 敵を攻りけりあつて官軍成負てあり何命を宗の華清亭に
 幸りてくせ死に覺装束の曲を舞せり山越ありしよき舞
 樂するは安福山が兵鼓鞀鼓動地して攻まりなれど後くせ死
 と車と同一西の方蜀に回へり落し長安の都と出く百練
 里馬嵬が原と云州に官軍の車成留て不進云宗怪て其故
 とを問ぬるに官軍河を渡りて此禍の本は楊國忠が逆道より
 出りし不進之天下乃右平不可有と奏りしれん不進也
 て物許わり因忠并小之夫人と殺りしり今ハ非子細と思食も
 此小官軍尚不進重く力成以て幸の公と問ぬるに
 陳玄禮と云者對てりしは禍の本尚在君因忠と云々
 因忠亦不進也

背さ天下今如此を制ハせ死が愛りし物なりを本と不罪ハ
 萬幸何ぞ成る請速にせ死と殺らん云宗宣ハるハ貴妃等
 一朕が側在り深宮小居く何ぞ因忠が及逆と知ハ候と云
 罪者されど殺ると不可有とて自ら鳳簾と褰り法車に御
 言成下し歎く情を如ひり対ふ力も重てりハ貴妃候は
 宗罪法軍已に因忠と雖殺揚せ死尚君乃左にありハ又何する
 者くせ死ぐんよ入る君に死入り奉るハ又何事か物なるん
 法軍乃ハ不安願ハ君明よ此と思人法軍安らんハ則階下安ら
 ん法軍不安ハ則階下何ぞ得安と再三練りしりハ何ぞ云
 宗力及び給は後貴妃を力ち下り給ふ力士候てせ死と
 佛堂より引く溢殺し其尸と高く車に宗を彈座に置く陳



云禮等と始り法軍勢を見せふかり法年是も恨み持て
 皆脱甲謝罪万歳と叫ぶ始り部伍を整て蜀回へて供奉
 志より呼是日何ふとて天寶十一年六月長生殿の樂一時
 了ぬく馬嵬の驛の黃埃よ深しけ翠翹金雀地よ毒く
 惟取おる者ありて玄宗ハ空しく紅顔と後りあぐ蜀回よ難く二
 年餘り乃老法と過し始り玄宗よ安福山ハ長安城よ入替り回
 號と改めたる靈と名付自雄武皇帝と号す玄宗よ依て
 忽ち貞貞と改てたり刺へ我子安慶緒又を怨事ありて遂に
 福山と改め又自立して天子とも命玄宗乃山子肅宗又兵と
 起して彼逆賊盡く滅して至徳二年十二月玄宗蜀より還り
 成り西京よ在りて上皇天帝と稱しけ天下再び唐よ復
 次是地あり玄宗一旦乃僻事ありとて他年の事ハはり
 不戻積苦乃餘憂又け海よ亮く至過と更めを此と悔の
 一乃今これ純友兄弟ハ皇命よ背き人望と拒守の事ハ色と思
 い牙と忘き一家二よ分く願は滅亡は振く事恰と春宅の朝
 日とゆがゆきりや人皆唇と翻せり

新編皇極經世卷第九終

前代宗廟卷之...

世...

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

方志事記卷第十目錄

龍後回柳川城軍の事

左の由敵忌崎攻の事付伊賀喜多郎討死の事

純素公親軍付漢楚鴻門會の事

権亮純素最後之事

忌崎城没落の事付伊賀喜多郎討死の事

龍後回柳川城軍の事

前代宗廟卷之...

世...

淡路島に於て... 淡路島に於て... 淡路島に於て... 淡路島に於て... 淡路島に於て...

新編 日本書紀 卷第十

後醍醐天皇御事

新編 日本書紀 卷第十 後醍醐天皇御事 年去年来く天慶四年... 淡路島に於て... 淡路島に於て... 淡路島に於て... 淡路島に於て...

新編 日本書紀 卷第十

采子の者共を集く尸若何ハ何極少也此城公頼頃年未
 間統後統前と領して貯置たる兵糧をわも早速は竭れ
 事あへんは又城中雖小勢皆令藏乃子高守共を以
 ろろごとと一めて身命不惜防く間力考よんをせむ
 由方計り計りて居候の那可遠相滞く城中へ物押さん
 ずり患の者候入まきく大はりも痛く攻ハ定く敵法方と
 闘く皆攻め下合を時件乃患の者兵糧少也と付く
 一粒不貽焚棄し城中忽ら將送よ痛き不絶自志く
 可居あり先一攻せめて敵を極く少しを獲よ終まで忠公
 へ入ると同月十三日敵の討より攻寄て礼拝遂本引退る際際
 まて近付く叫喚く攻よりくる城中ハ敵乃推量し相違
 て兵糧考く喰盡し今二三日は絶ハ皆飢ハ可耐んやれん

意に敵寄り快く討死せんとの時帝されんやトハ女を
 可居候二乃城と固め兵共亡言ハ同討より打て出んとはこ
 つまらぬ漕谷左司右衛門恒雅定本く早用んとすり別と押つ
 旁く率雨を打て出候事不可有ま子細ハ城中既ハ糧盡
 今ハ此城して立切し難叶されん患く敵不寄り一方と打
 破く考て固へ立越宇佐城と一ハ城く拉敵計畧を廻れん
 と仕所考りま敵今日攻寄れば兵軍して後日敵後と疲
 らる也中固の越よ及ぶ敵の後と窺て同時より打て出懸横を
 盡よ盡る行あふまきく不敷北と云くと不可有假令不敷兵
 を向一方と打破く直よ考あ可打通と惣大将より此下考り
 中尸考り皆此考同て一人も打てハ不生唯夫軍よ討合後
 決寄ハ得ず此一奉よ考考んとしてすり考北守敵打て出ハ



が乃眼と射通して矢尻三寸計朱よ深く貫き入り
大刺れはなれど純宗二言も不善馬より真倒よ岸破と為
般通胡縁と叩き矢呼べし寄よ乃大右軍の依純宗と赤伊
雲守般通が唯一矢を射留ふ所を續や人々と呼りしは
さくさく小勇進す所は方乃舟跡是は棧と得く東西より勝
阿作と攻合す勢はれ勢一萬餘兵力と為し棧と矢ひ射く
不敵くはるが中少井原平内射しそまじと成世何の向
目わらばは後とて逃り勢は中より再び逃し只不殺致して遂
く河死をりりりそ外の者共ハ或ハ敵は追攻られ祖を討
け普とわり或ハ也具と脱棄して方去るは後よりわりさて
して般月のこの一町は狩と城中乃共共園と出るは猛獸の
千里の曠野は遊ごし

左の助殿里湯攻す事 伊賀赤治命討死乃事
去程小宇佐瀨ハ宰府島勝乃二城と可殺黄とて晝夜難軍
立九回皆敵は属し所くは要害して城中は志と通はるあり
すれども安ん打て物事し不叶空く先任とせりは處に二月
十六日大宰大貳公頼便者とまき宰府と可殺黄おまじは牒
されど法大將不斜喜はくはて法方乃は命をまきれ同月十九日
左馬内滿仲ハ一萬ふあはれを引率し島勝へ向ひはるむ小野朝臣
好古は強と經基二万ふあはれして大宰府へ移寄り同月廿日
後後同林月は着はる八回乃軍勢又雲霞のくくは馳加て時を
同よ又萬端は餘りなれど今ハ敵と交あえ事可容易とては事
不勇進と云者ありりり勢りけりは又柳川より飛脚到來とく
今朝辰乃射よ大貳公長日勢瀨乃方と依らん又老命有限

六十又殿とて俄に病死はり畢ぬ修之南子の兵備衰微欲運送
 喪之間一丈し欲運我傷者あり宰府の相承可お遠乃回念告知
 と我り多ゆお將顯悲傷あり実と大ぬの逝去しゆふ古年常喪
 て軍也事不可然として別は使者と副く人々の悲嘆と慰ち懇
 へ心喪と可致勅仕の旨とて宣ひ遣されり翌日一日逗留有く
 又軍れ自分とまきり好古朝臣ハ憂くより大子のたね軍これ此
 夜し徳回乃勝と相交へ三萬の兵とて久留米より唐津迄と遠
 へ打廻く侍々津へ打て出たより大いびくもてり大縁のハ搦りて
 へはら推るれ之とまれハ大子の勝廻る間尚秋月は逗留あり
 て二萬の兵とて扱はれり初てたより満仲ハ同立日柳ヶ浦よ
 津志は不知く筑前回宗係大宮司政運三百餘艘乃兵船と連
 係東方より東向し一ッくれをたると物使をまきり意て武勇れ

卷之五より有る修く難欲令催但境と隔たり間不能其美の
 如く平迷乃事向成し神妙も是作也其此兵船軍は別り
 りんすも直ま舟とて向たりし合ハ明日辰の一懸とて夜中
 々の係之宗係兵一人し舟より不上陸乃旗のまを守り刑り
 舟に漕ぎ入海より舟を寄りけり去程の合ハ比やて如くバ
 思津城に口方より夜圍て縁波を發し矢石飛び海上より之
 舟毎に怒りたりとて遠回しを放り多勢降下ハ汗馬地運ハ津
 入り中とゆへ舟は脂と流し令と限致たりたり城中より打て
 出し舟兵五百は船に夜格を我失ふと引て入り候候事此節先
 とんくして一軍とて南乃係系進射して可思とて八天隼の威の
 棒徹し煙もみ打振く程く如く如く多勢の中へ打入く口面より
 南つて八方は相受て打休を難とせ内乃回ハ二十八騎と討捕あり

投りて其の地勢を恐怖して色も道付ものぞや。家も去年
 此城を援懸して名氏隆くは遠山左衛門三郎宗持ハ十九日
 乃ち合ふ傍くたる也。殿乃ちも屬して居らる。が伊賀守は部
 が傍若無人の振廻と見ゆ。年々の望も今日も叶へり。大は喜
 び法隆と合せ。魚舟り伊賀守反此の御城。其は難免のこは
 窮りん。望く日体是く夫一翁進軍とを呼りり。乃ち部聞く
 近所望と作り一夫ハ限守とを多千本も射ゆ。音の射ぬ
 夫果の隆乃喜と檢ゆ。程の事ハそと有ゆ。公共其のうな
 ことと云んし。嗚呼。うま。人すハ何れなり。其勢も射し。鎧突し。件
 此金棒と杖。突存用と仕く。二日あつて立りける。を山憎と
 敵の廣さ。己も城壁より其や。射通さ。可有し。又人強乃
 丸本れり。引固めて兵と射り。心も夫所ハ遠く。其世も衰を
 不松二の矢と毒と始り。も狂強く引続て下り。射も去此矢も
 亦初乃。く。このハ。急や。と。鳥と。世のく。射も。其の。ま。と。唯。養。毛。の。如。く
 射。愈。く。一。夫。と。衰。と。檢。ゆ。ハ。遠。山。の。う。ろ。く。射。り。程。も。夫。程。稍。く。射。魚
 して。僅。三。箭。ぞ。残。り。たる。遠。山。の。ひ。ろ。く。ハ。透。り。と。笑。へ。て。射。り。も。衰
 成。檢。ぬ。ハ。物。具。の。真。好。な。れ。と。眼。中。と。射。ん。よ。ま。ら。仕。損。ず。り。後。や
 わ。か。と。そ。ん。成。況。め。く。お。妻。ハ。さ。り。く。と。列。り。の。何。と。は。は。り。り。ん
 弓。弦。ゆ。つ。と。切。き。さ。り。け。り。伊。賀。守。あ。う。く。と。笑。ひ。と。噴。き。を。始。り
 尸。つ。事。も。餘。り。え。り。く。立。す。と。そ。檢。も。己。も。退。屈。り。最。り。あ。ん
 が。運。命。し。是。ま。ぞ。と。く。又。尺。條。の。た。り。と。振。り。鳴。林。の。雀。を。け。り
 喚。く。蒐。く。遠。山。し。此。と。先。達。と。件。の。う。れ。未。弭。ま。て。名。刀。え。と。は。よ
 しく。人。ま。り。せ。び。唯。二。人。も。魁。計。ぞ。蹴。ひ。り。前。代。妻。乃。見。物。也
 雙方守り居り。居り。居り。伊。賀。守。沈。て。馬。に。法。勝。難。く。不。掛。切。く。ぞ。あ

不松二の矢と毒と始り。も狂強く引続て下り。射も去此矢も
 亦初乃。く。このハ。急や。と。鳥と。世のく。射も。其の。ま。と。唯。養。毛。の。如。く
 射。愈。く。一。夫。と。衰。と。檢。ゆ。ハ。遠。山。の。う。ろ。く。射。り。程。も。夫。程。稍。く。射。魚
 して。僅。三。箭。ぞ。残。り。たる。遠。山。の。ひ。ろ。く。ハ。透。り。と。笑。へ。て。射。り。も。衰
 成。檢。ぬ。ハ。物。具。の。真。好。な。れ。と。眼。中。と。射。ん。よ。ま。ら。仕。損。ず。り。後。や
 わ。か。と。そ。ん。成。況。め。く。お。妻。ハ。さ。り。く。と。列。り。の。何。と。は。は。り。り。ん
 弓。弦。ゆ。つ。と。切。き。さ。り。け。り。伊。賀。守。あ。う。く。と。笑。ひ。と。噴。き。を。始。り
 尸。つ。事。も。餘。り。え。り。く。立。す。と。そ。檢。も。己。も。退。屈。り。最。り。あ。ん
 が。運。命。し。是。ま。ぞ。と。く。又。尺。條。の。た。り。と。振。り。鳴。林。の。雀。を。け。り
 喚。く。蒐。く。遠。山。し。此。と。先。達。と。件。の。う。れ。未。弭。ま。て。名。刀。え。と。は。よ
 しく。人。ま。り。せ。び。唯。二。人。も。魁。計。ぞ。蹴。ひ。り。前。代。妻。乃。見。物。也
 雙方守り居り。居り。居り。伊。賀。守。沈。て。馬。に。法。勝。難。く。不。掛。切。く。ぞ。あ

けりか元來意んや此男とて為候は極打は伊賀者此節が甲かん
 所と云ふぞ打よりなる遠山と云ふは太刀石をそへ懸て
 と斬く切刻の節最上の劔よりけしむし甲れ所と云ふ骨と碑
 て三寸計切込さればしとて伊賀者大事のまされど目これ心
 りくそそ是りとならうと知と遠山判銀と云ふ押人首捨落し
 太刀乃落小貫と鬼神と云ふは伊賀者此節と遠山此節
 宗持が討捕よりやと云ふ声は呼よりと此方の陣あぞ引よりや
 伊賀山とお告小伊賀者首とんとて去年の秋も打運て伊賀
 鬼と云ふりて交野荒太節時澄は今朝より南の山のふ小敵
 走へく居よりけり伊賀者と云ふ山と云ふ節と云ふ一教と云
 奉りては早首捕指上しれしを云ふと云ふ此節討しと云ふ
 一や先乃此節が伊賀者よりと云ふ此節よりと云ふ伊賀者太節より



此未苟と骨肉同胞の流るる非棄不の也一七其小朝敵の
守此墨事也他純友が不義と成る私の君意と逐んたり去
心事府も欲全發向の如く迷ふ幕下れ圍ふ遂く不思那及
挑発事弓箒れ習儀い空是非半居今悔先非謝罪して軍忠
と官軍も勸えんとん終の幕下密愛憐今まその許罪責於
い生方の所望是是時此極先日しりて入と存い久しし合
しりて日ぞ所付此我暇の方ありやう原進引す者ふ今日
得須臾の暇隙而聊述數日之胸懷備ふ公の吹捧と仰ぐ若此
昔代所依りて幕下城中も被曲言一時の懸念と役もて連
日中軍勞とありとんとしは要人の例言しそいつで嫌致と避
作らるる城中兵急く柵下よ切い久しと但一饗應のあり

若輩れ歩卒百人城中も穢いゆも幕下來智と許い公平
和睦の道直も麾下れ後も後く身と官軍も委く朝敵追伐の
下知をさしん所不徬併神明乃任知見此信具も言上有く
治り久くと學言も一紙を知り誠も他事もさげふぞりしは
重光熱く聞て去は涼く呼引寄奉討く光の不熱ハ事と使者
い寄て陣中れ葉内見せんるるへ一重光程のものか是折乃
保も落くうらるは使者れ取次をりえど法人もは振をさ
れんらハ極く引寄討く控んとらひいぐのやく何事やて且よ
不許上すして私も保せんハ楚忽のむるへ一彼等ていの着を壁
六人十人誅すして何程の深るる可費せとふあして快き面
を和の委細兼届も心を唾も極く極く此有とらく真く平
上すも果を流へ来く海新トゆんまで八具く山を以てそを

あつて備子子の老母瓜招さ必焼山候すまそて
出さく事い如何計らひんやと
る如字も又石取りて打突ひ勢くともりりとの
便若石と宣ひたれど重光し懐くをひかき焼山と具
して物より元徳ハ今りや失りまんと更よ一念
方小眼と賊く大軍子奉駕備仲宣ハ方ハ東て南回、旬
くして救日とゆる事備上公の意あり然る小非と悔やま
少改て朝家よ御服く如人事まると神妙ま是く公乃和栗
と乞まんよ何系欲若天下之民父子好挑我平と青己子
けく不約見の日必可入身と書ゆくPふか
そて賜りける元徳ハ魁ハから化して喜ハ勇王城中
後宗臣乃一族若小仕重光をせ此若子信のく此計らひハP
ら附く乃の信若若餘り子徳俊乃の信少敵乃保り
作何さ信賢を存んんと重信ハP久か備仲彦
小非子是ハ敵乃保却く味方れ方俊とまりぬ敵の没落の夜
を不圖をぬハ昔秦乃世傾んと也一時天下大ハ礼をく
不安法列刺史信縣令皆自立てまると其楚乃懐王信也
物すく先秦と破く關中と定めんと者ハ王と也んと
然ハ小漢乃信公信也先之函谷關と破く秦ハ入る秦王子嬰
素車白馬よ来く根道亭乃倚り出く皇帝乃圍符離と放し
て師公小沛と樊陽と始ハ僕乃信也信也秦王子嬰と
師公の曰く人既ハ服降せり又執人事不承りとして子嬰と
て覇上置く軍次信縣ハ父老豪傑を名て曰凡吾此も
故ハ父老乃るも害を除えんとり侵奪ハ所ハわん必思



事多れ又吾覇上は軍に事ハ諸侯に事トシテ
 是れを以て此の則に章の法に依りて
 秦人たよ喜ひ業流しんと如故競争ひく
 牛羊酒食以て持て
 沛公の軍を以て響かす沛公又譲りて
 不交して曰く倉粟
 して之を以て非ず不効費人ト云ふ
 依りて沛公益喜び多
 人沛公より沛公ハ秦の富より十倍して
 地無疆一多
 楚乃項羽を以て關中を以て
 今沛公は沛公を以て
 有つとと不得意を以て
 函谷關を守りて
 項羽と
 依りて入るは
 關中を以て
 沛公則此計を以て
 以て軍兵を以て關中を以て
 項羽果て依りて
 沛公の兵を率て
 已に關中を以て守り
 關中を以て
 沛公は沛公を以て
 關中を以て
 沛公は沛公を以て
 關中を以て
 沛公は沛公を以て
 關中を以て

中守漢の兵くく守く移く不用開時小項伯が老臣は范增
 とそののり法卒は下知して新と移して開門を焼く守漢
 此兵防小軍術開門と開り項伯は時より移して始く開中入る
 と得て陣を造る、戲乃死す、沛公は陣八霸上在り、未
 項伯と不得身安は沛公を既た司る曹無傷といふ者んと項
 伯不通して竊く人をして項伯に傳りて曰沛公開中も王
 守人として秦王子嬰と相り、秦の所實悉く有つ今連よ
 殺兵不討開中と定し、事と不承今此内應の出城く移
 と曹無傷項伯に報く賞と求人といふは、信く范增項伯を
 翻りて沛公と擊し、項伯は義を同て方よ兵と殺して且
 明小戮之守是時項伯が陣ハ豹豊乃時門と云所は在り楚の
 左尹項伯といふ者ハ項伯が季父有り、素より張良と交り、此況は

明日項伯沛く、死く張良と亦不得免死といひ、吾等よ地く
 沛公の陣は仍く移し、張良よ恩く具よ、事此術を造く、保り
 強と去く張良が命を救ふんは張良が曰我沛公よ信く、そ
 今事此色も、ゆとんく逃去く不殺有り不可不難と、故沛公
 よ昔沛公大よ、今此余所して免之とて、甚固章を、れ、何
 張良が曰今味方の兵八十萬、沛公が梁ハ四十萬、何ぞ此大敵よ、高
 沛公よ、沛公項伯よ、張良よ、沛公を教く、項伯よ、不叛と、昔、人沛公を
 といく、沛公と親近あり、張良の、と、秦の、は、我と、友、なり、項
 伯教く、人、計、と、し、項伯を、明、故、今、事、此、志、を、信、て、こ
 い、い、沛、公、昔、臣、臣、が、命、を、救、て、彼、を、事、す、今、沛、公、大、喜、ひ
 是、を、項、伯、を、呼、張、良、出、く、吾、項、伯、項、伯、す、れ、ら、入、く、沛、公、こ
 危、酒、を、殺、ち、奉、を、介、て、吾、園、中、よ、入、く、秋、毫、と、も、一、く、不、有、所、犯

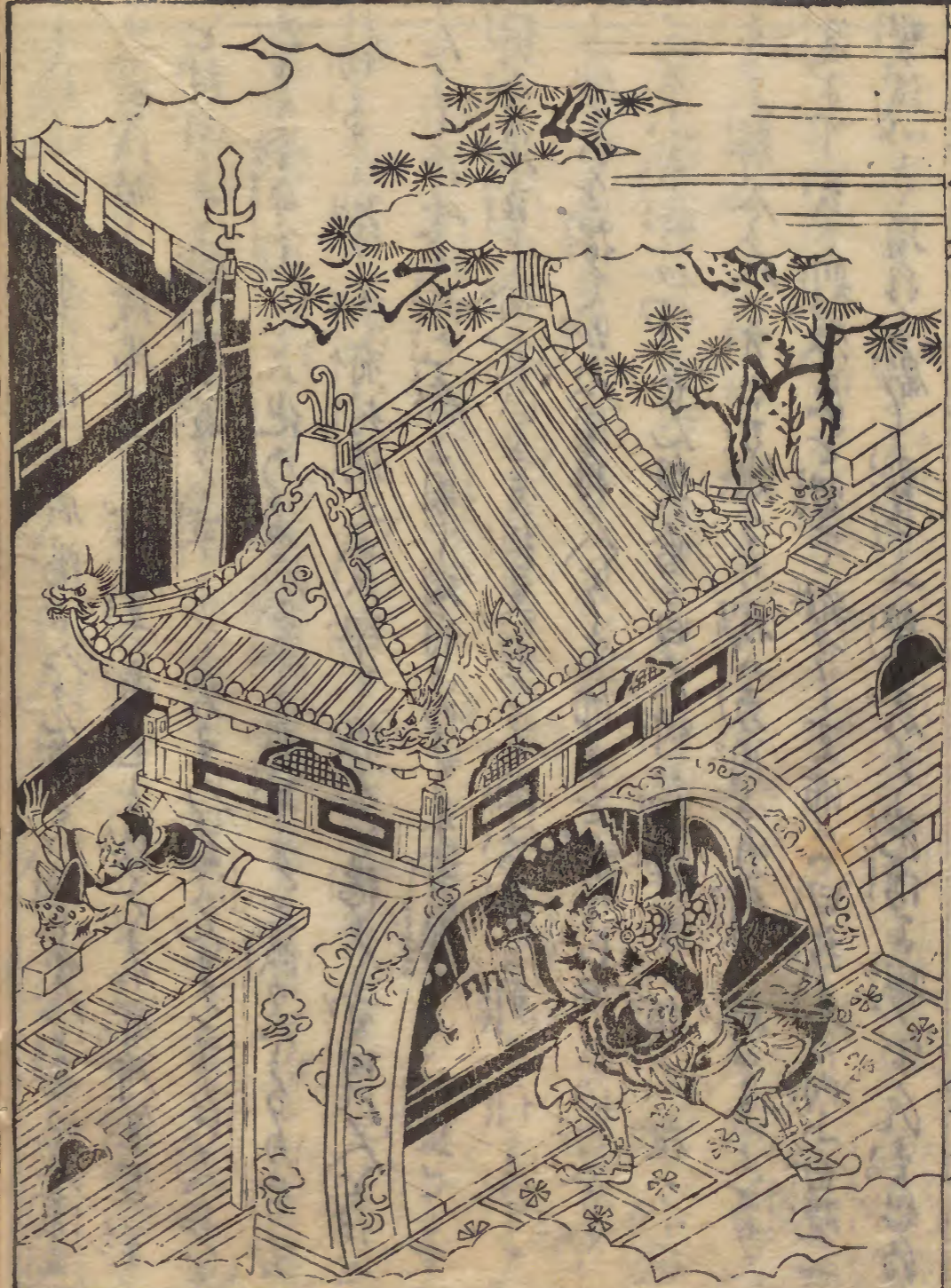
前之項伯卷十

吏民と籍を府庫と封じて軍を治り又兵を遣て國を平し
 事ハ地乃盛れ出入ト非常とと誠んるなり日取ト大生を以ん
 るを心豈敢と項羽ト移人ヤ移ハ項伯具ト此後を以て
 か移く項羽ト不叛事ト責項伯許諾曰項羽殺兵且日トせん
 と兵兵ハ益を久人明報致く今トせん項羽ト謝トせん
 信守項伯トと布トせん楚乃軍中トゆり具トせん布トせん
 項羽ト告トせん先不被國王豈敢と得入乎今布トせん切あり
 擊定トせん且日トせん楚トせん王吾遇トせんハ不如此トせん
 項羽ト許諾トせん取のけと布トせん百餘騎トせん移トせん鴻門トせん見
 項羽ト許諾トせん曰長將軍トせん力トせん戮て攻秦トせん軍ハ河北トせん成トせん
 南トせん鐵トせん然トせん自不意トせん徒先國トせん入トせん破秦トせん今日トせん此トせん由トせん是將軍
 也トせん小人トせん力トせん言トせんわりのトせん臣聊トせん恐トせん人トせんと敵トせん金トせん
 長トせん臣トせんがトせんるトせん何トせん

項羽乃曰沛公此左司馬曹公傷吾トせん告トせん曰沛公叛トせん不忠トせん
 何トせん此トせんトせん沛トせん公トせん留トせん酒宴トせん外トせん及トせん項羽トせん
 伯トせん刺トせん留トせん度トせん范陽トせん南トせん相向トせん坐トせん一沛トせん公トせんハトせん留トせん坐トせん
 強トせん臣トせんハトせん留トせん坐トせん范陽トせん南トせん相向トせん坐トせん一沛トせん公トせんハトせん留トせん坐トせん
 擊トせんまのトせん示トせん之トせんトせんハトせん項羽トせん然トせんトせん更トせん不忠トせん范陽トせん南トせん相向トせん坐トせん
 紀トせん之トせん項羽トせん乃トせん從トせん手トせん項羽トせん在トせん在トせん曰君トせん王トせん不忠トせん人トせん不忠トせん人トせん
 てトせん在トせん事トせん秀トせん畢トせんハトせん鈕トせんトせんトせん在トせん浮トせんを窺トせんトせん沛トせん公トせん擊トせんてトせん君トせん
 日沛トせん公トせんトせん汝トせん屬トせんトせん漢トせん乃トせん虜トせんトせん人トせん項羽トせん在トせん在トせん沛トせん公トせん擊トせんてトせん君トせん
 秀トせん畢トせんトせん曰君トせん王トせん沛トせん公トせん欲トせん守トせん軍トせん中トせん樂トせん以トせんトせん事トせんハトせん沛トせん公トせん
 りトせんトせん沛トせん公トせん項羽トせん許トせん諾トせんトせん項羽トせん在トせん在トせん板トせん鈕トせん起トせんてトせん項羽トせんトせん意トせんトせん察トせんトせん亦
 坐トせん紀トせんトせん同トせん板トせん鈕トせん起トせんてトせん項羽トせんトせん意トせんトせん察トせんトせん亦
 不トせん得トせん擊トせん時トせん不トせん強トせん兵トせん軍トせん門トせん乃トせん外トせん出トせんトせん樊トせん噲トせんトせん見トせん也トせん噲トせんトせん曰今日トせん事

奈何良曰く如く是れを今項在拔劍年を意偏は沛と擊
 んとあり嗚り曰此軍より與し金と同く是れを即而劍持盾
 軍門より入るは沛門を穿り兵止る不入樊噲怒るを盾と側く
 以て撞て入る兵皆地を推仆されくお免くは沛の樊噲惟幕
 と撞る劍を擲く之を以て目と瞋して項王と駭しは目眦盡く
 裂るも頸髪より指く胃液貫く項王跪て劍を擲て怪て曰奈何人
 ぞ法を白沛公が執事樊噲を以て有るなり項王の以て壯士あり厄
 酒を賜ふとしてすれは沛公の酒と與ふ樊噲釋劍して起るは沛
 是沛能じ一乃の壯士を流る有沛公の樊噲を以て壯士あり沛
 沛公を以て劍を擲て切て嗚り項王曰壯士あり能復飲んか
 曰く沛公死して不辭厄酒何ぞ辭し沛公は是れと飲ん
 曰夫秦王虎狼の心有り能復飲んか天下皆叛く懷王法を

と緇して先秦滅破く咸陽より入る者といふ王といふは沛公
 先秦滅破く咸陽より入る怒る兵毫毛し擲く不有所遺宮室
 と封閉して覇より還る軍して大王の事とせは又兵を
 去る令守関して他乃盜り出入り非常と備めん有り苟若
 此切るは未だ有封侯之賞却て偽言と聽く有刃人といふ也
 んと沛公事此亡秦より同く項王よりく不有應しは曰坐せしや
 樊噲張良と相並ひ坐す須臾あり沛公起て劍を行まひは
 んといふを擲て物ぬ項王人として沛公と曰く沛公の曰今沛
 公は沛公解如何せん樊噲曰大沛公細謹と不顧大禮は小謹
 を不辭今人ハ方より相より我ハ腹肉より何ぞ辭することせん
 遂に可去し則張良と留て剣を以て沛公曰我身は沛公對小白壁一
 雙は以て項王に獻し玉中一雙とあり范滂より與んとん是れ



前九景記卷十

十六

小會て未勦我軍中より即ん此と成るく入るる我敵也よ張
良謀く張守是時よ沛公乃軍霸上在り鴻門と云ふ事字
到沛公車路と止り脱身樊噲夏侯嬰斬彊紀信等の口を挿
劔盾歩り急ぐ鄒山乃下り芷陽と居る間道より入りぬ此
道二十里よ不遇初て張良今ハ沛公軍中よ即んを思ひ先項
羽謝して曰沛公杯杓よ不勝して不能辭待て臣張良として
白璧一雙と奉じて再拜して大王乃足下よ獻し玉斗一雙とハ
再拜して大將軍は足下よ奉じて項羽ののち沛公安し存り
張良が曰大王乃有意と欲く刃と脱り逃る我軍よ項羽則
彼白璧を受く坐上よ置く花酒ハ玉斗と急ぐ此よ急ぐ劍と
挿る撞ぬと曰嗟豈子嬰よ得るよ不足項羽乃天下と奪る人
之必ず沛公をん吾属今よ是が為小辱と云んると急ぐ人

度くして竟よ項羽を負て烏江の所はく自刎て死す沛公
遂よ天下と有り漢乃高祖是より今絶素鴻門の會と云て
我を欺く城中よ招き撃んとん我此敵を急ぐ不許を
勝るよりやのん殊よ敵の謀却く味方れ御さる事ハ燒山
がいつハ城中に兵急ぐ柵下よ即 響應のたよ百餘人と張
るんと此百人ハ急ぐ絶素が股肱耳固と云ふは其急ぐん
ゆ方し運兵百に紀して可仍新案絶素が計數ハ坑と據るり
伏兵を殺るは是二河よ不遇既よ酒宴を急ぐん時味方の
糧は彼の陣屋役所よ火と可差敵の百餘人急と活んて
固案陰ん此時力量打物よ急ぐん兵絶素が度よ可討柵外
不中より兵火乃よ急ぐて城中よ入んとす人一を討味方
此勢敵を城中よ入るゆふ可致を急ぐ小其回ハ具守まき

陣中、残く討とらるる残るる一敵、競争して城よりんをセバ
陣の張板自在なるゆへ、影も痛く攻め入城へ入部、あつふ
ハ易らうん、然るハ皆やとたふ、戦く十方より、藤原、藤原、城中に
て、先きを討滅、しをも、彼何しとて、う、此城と、事と、深人と、宣
ひ、れ、心、此、理、も、服、て、勢、す、ゆ、ぬ、い、り、り、り

信亮純素君後之事

同日、十三日、武陣、和、睦、と、余、を、れ、を、法、年、動、び、を、不、為、と、事
か、城、中、と、は、物、の、と、く、三、萬、の、兵、を、目、見、こ、の、討、中、は、皆、無、か
い、出、た、ま、の、城、際、より、も、山、の、も、ま、で、惟、暮、と、至、て、陣、を、り、宿
軍、や、と、箕、田、仕、中、陣、は、あ、つ、り、と、突、く、相、も、君、何、ら、が、柳、や、
は、い、非、可、呼、の、と、て、侯、美、事、を、命、三、万、騎、う、た、お、と、て、柵、下、に、せ、
陣、を、張、る、城、中、に、残、り、の、兵、を、て、先、素、か、ん、中、の、保、と、知、る、者

ハ、あ、り、り、り、勢、で、年、上、討、よ、及、ぐ、大、將、は、る、也、深、由、仲、赤、比、の、沖
乃、澄、直、垂、も、前、黄、白、乃、腹、巻、を、着、一、衣、冠、引、緒、で、月、色、の、馬、り
金、霞、輪、乃、鞍、置、を、く、ぞ、お、つ、あ、つ、ト、邪、劫、解、中、治、宿、金、化、の、雲、
刀、を、持、く、大、將、の、た、よ、引、流、く、せ、作、ひ、り、り、を、月、も、大、奴、の、下、よ
腹、巻、と、着、り、無、衛、尉、重、光、乃、派、作、一、崎、高、子、と、若、成、修、ら、る
兵、皆、布、衣、の、下、よ、腹、巻、を、着、て、前後、は、七、よ、打、つ、と、み、そ、外、足、控、乃
兵、器、均、具、し、て、六、十、餘、人、は、い、候、寸、既、よ、た、よ、の、路、際、を、で、打、寄、せ
は、く、で、信、亮、純、素、大、奴、よ、立、烏、帽、子、着、く、一、の、刺、ま、で、出、迎、入、宿
位、よ、請、い、奉、つ、と、勢、を、首、踏、踏、て、悔、罪、と、謝、罪、と、事、昨、夜、焼、山、が
ゆ、り、不、遠、拜、射、一、畢、く、首、酒、取、膳、と、殺、く、響、應、す、り、事、不
為、常、獻、酌、也、よ、さ、り、て、後、年、の、程、十、六、七、八、九、亦、計、の、奴、廿、餘、人
牙、ハ、後、牙、と、筋、で、面、ハ、粉、脂、と、粧、ハ、馨、香、者、出、中、よ、董、下、信、く

石の池あり深曲廻歌也形勢ハ子本の櫻時をぬく後ハ海
 花の色如糸の山は梅夕日流を曝ぶとくより酒宴を討ふ
 備を興入る中ハ兵束村重光ハ傍ハ席を起て唯一人城中
 と打廻り此波の流りくまを若依兵や有らんといひ廻り
 うして怪と體もんとさうけり重光殊不意おたりハ命を付
 て見ゆ中門のひられ傍ハ女一際とらと見とるれど心ひ
 懈りてゆと女捨てられ本乃端すく想とさうけりまを
 急と探りるるお方軍人飾り此旗の板よりさそハ此下ハ紐の蓋と
 植さう兵と宿さうけり耳と地は付く家よまより勝さう兵
 三十餘人伏せられ糧の金物かしくと聞へり重光打領許振
 動して傍よ立奔色瓜るるふ二の旗の屏陰ハ大石と裂りと
 とく徳とふを轉り来く傍の板の上よ七の八川重置さう

乃れ中さゆ共乃可出振ハさうけりけり振仰く見とるハ早朝
 の討さうりりり時分も好そとけりハ是夜の兵共ハ此と目合て
 何いさく本乃座よ着ぬ是夜の兵も松ノよ坐を起て傍ハ此
 敵の標所より火は差さり敵の兵も八角あるべしハ心ひと
 不弄りハ不在す所より極大燃出能懸掩ありけりこハいせ
 んと澄さうりくハ把さうは此體と聞かれと然とさうぬ祈りて
 聖酌須道と不播汝候壺の舎とぞ有るハ備仲宣ハハハハ
 月ハ慈唐殆殺軍芳入具乃餘り退出の朝を忘る更ハ不所謝
 作又ハ見とるさうりくハ起ゆと絶未指さる答り聞の隣子
 をめてハ人ハ次昇十郎正治鳥楊子布衣かから棄絶多て絶
 素が大紋乃神を扱ハ凡賓客退時ハ主人出く門ハ送ハ是人倫
 志禮前より誘此方へと引去るを絶未意得たりとさうと絶上

と下と標合たり元来純素ハ大カノ寛ある者なりしゆ身ハ可
 誠討奔しとや有ん大故乃神大ハ只禰子とて是自任在事
 たりたれと遂に下ハ成く首を擡まきり城申れ兵共大のふて
 防んそをたを失ひしふよ大ね純素の首捕く指上たれんゆ
 擡を失ひ唯懼とふ御と此故ハ個長より申や焼山天子杖
 兄弟は是都合十餘人左方の室地にて降とまきり打てあつ成
 以方ハ兵廣庭ハ偽引物真中ハ取擡く一人ハ不討付留より
 一とをたりの軍より柄と顯ハ武威を擡ハ純素恐るは謀
 て却くそ身と臆ハり君子を以可逃より不可逃より可取より
 不可逃より

是時城は落り事 自修契を所が事

其面仕ハ諸子流く陣をりけり相討の比ハ成れと思ひ大ハ
 乃圍進く陣を寄りたれん修契を所が事 懼く思ひ同く兵
 と進めて相進はく先城の方と見送りたれん無火事ぬら
 たらをりすした事よるぬと圍の中へいんすをを官軍の方
 六子餘勢敵と城ハ不入立と據を並切く身ハ礼合と懸
 たり切るとは知ハ田井正治大ハ此は擡より如何ハ方の人
 人由大ね安恙坐す一城申れ敵一人ハ不討付捕申や信亮
 純素を思ひ此正治ハ付留より是思は人常とて純素の首を
 乃指上たれん擡を指上たれん擡を指上たれん擡を指上たれん
 不勇時作く萬歳と叫ぶ敵の兵力と落し日ハくも勦
 勇盡忠極將義率も忽意勝ハ可剛義勢も少く城ハ山ハ城
 川と流く思ひくは流河のり信亮を大郎腹と立今ハ是すて
 思ひ人とする大カ方指書のとくむらたのくは萬流の中へ懸

へり敵を搦り片打少く難ざりけり官軍滅ぶ大母を
 フト又どしを成し碎易して唯十方より矢余と送く遠き
 こそ八射よりもほ存在少くはハハやく極り記者の夫先子
 歟く死せんり八宰府より重くは大事は送て死せんと思
 ぬし落し西方に跡を遺く十方より送く追至りし敵の
 勢生捕を先立勝軍してゆりしは舟の中より入些強
 学し切抜く落しけり去程は鞭を合ひく馳りけり
 間たかた攻められ小山の所を以馬儀息絶て道は倒し
 て死たり存在少下立く日比乃早立り此時より是と限
 り急ぎけり急務より宰府まで八里道二十里八間より十
 三日を函の上越し急務と急ぐを夜に寅れ越しを宰府にて
 着ふは此城は去月廿六日より数万の官軍打圍く急を



不造秀頼人中やちの八小野朝長好古三万石も東西二
 三里の間よまの所の橋をの津屋所控と連の棟をかへて
 一條二條の大路のどく仔細考八城中よんく傾ひられ共又よ
 濃く可入橋ありけり此と思案一濃のちの津屋の橋よ
 火と付をまて澳より波風吹きき炎十方よ應教經權軍中に
 充てられし宮軍是よ後終く上流へくと度と考よを紛よ後
 考よの儘よ城中やをよる直よ絶友が敵よを共去年
 のを兄弟中画くく如く東西よ別き一付仔細考兄弟を
 絶業よ後く玉修よ在られし何故よ考きつれく心動きよを
 打解よお解よありしひ出せり細しありたり左部よける八徹り
 何よ天魔の所ありや不道よは兄弟中不和よ如所小難
 解よ八柄ぬ山連枝の山中やれど得るくは和睦可者と考一徳を

を中までりて殊よ敵回進くは落城と考一敵は供たりと
 不依く得よは不義と蒙りし怒よ今友志くの事よを
 自決せよせ如く作果し由最後乃由供よを供り作んとな
 一敵陣よ掛く死ねむひりくひひつとよまよまよま
 不果く可然敵よも不遂所詮考よ由不義ととゆりこれ進
 せくを右も如く亡魂絶業乃由畏くとな一全甲裝金を
 由果よ作と涙と膝よ掛あつ檢口説りたり絶友八舎弟付
 死しりつと考く大よ力と考一考よ由色乃洞のどく一旦乃
 憤つよを眼とめとよと争う同胞の情片時よ有忘平殊よ
 毎度強敵を退め徳回の軍機属頼事偏よ絶業が威威り
 在り中絶の間を更よを忘時今最後乃後を考く我人恰と語よ
 まよあものどくと直垂の袖をを縫りたり仔細考考重てり

今敵中の兵をうけつゝ二萬餘は不過敵ハ是より十倍有り尚也
 愚考の定む地がらバ跡月々餘る不のた母に敵く由る兵勢
 を春も此城可難守致上馬場之城はあり宰府亦大敵
 一圍をとりと風交せし由方志を通ずる四くの弊一之敵よ
 屬し作ん波も果唯今城中よりん敵の陣を打たふはよ
 竹葦のよく取圍ぐ咫尺の比し人あらずと云所あり去ハ敵と
 劫して其物とよひんん陣を乃權火と差られんわき也
 唯作人濱風烈くして怪火の身より熾よりて陣を破るは是く
 作唯今城中より打て物とんは壁に敵幾萬餘の勢ありやと
 一方を打破く通ん事可頼して作一先箱崎の陣まで出陣
 して舟に被官山陽乃の勢を付く舟より敵を責率以てし
 海原に追てめ残んは若し不勝勝利は百餘を獲るは攻めく
 二

船乃ましく如く日本と引交闘んハ中々交合戦の便一々掌
 を握るべくよりわれは純友打領許左と右と寫く汁は人形
 機之事して舟を可難合相のつて見んとしわれは伊勢舟を
 して作某今夜踏浪して海賊をを借して舟兵用意して進む
 一則箱崎乃陣を相約久しとすれく久くわしれんを拒可被
 願とす寸絶友たも喜ひまてハ敵乃備人の乱る中よ多敵ん
 して敵中此其を一所集めて二萬に此出と喚ひく急ぐれ
 舟に乃兵後ハ極大燃来り前ハ強敵攻進けくおははは
 法軍陣を破るより絶友陣を魚鱗に立凝る由横より
 十文字に急通じ敵を四方に逃散して馬の鼻より廻り箱崎
 を拵て引く作く

○箱崎の陣 純正最後之事

Shimada Jaki I



七



前大坂巻

七

凡そ此の如き

此の如き... 朝宰府の政を以て... 或ハ法陣乃合戦... 都府の時ハ八中... 船中... 凡そ此の如き... 朝宰府の政を以て... 或ハ法陣乃合戦... 都府の時ハ八中... 船中... 凡そ此の如き...



前巻記卷十終

